

## 一地雷戦関係技術一

「3020年代の世界でも、「主戦場」及び「前線」と呼ばれる惑星、地域において、生身の人間が行きしめる有効な対メック戦術であり、メックの不足を補うべく大量に運用され始めた装甲車両を対象とした有効な戦術として、地雷戦の重要性が見直されつつある。

地雷戦とは、地上戦力の骨幹として戦場に君臨するメック及び装甲車両に対し、障害の構築の一環として存在する技術であり、その概要を以下に示す物である。」

☆ーなんてノリでね。 なお、参考資料としては70、80年代の奴は高度に知性化されていてメックウォーリアーの世界に合わないので、端末技術のみのピックアップに近いので、そのつもりで（……だけど、振動地雷自体、極度に知性化されているよなあ）。

テクノロジーの参考基準として、80年代の地雷戦闘基準は、

- ・幅1000mの地雷原
- ・触雷率70%
- ・1ヶ7.5Kg
- ・400ヶ（一単位？）

……である。そして、1000m→30mで120ヶ

目標感知能力の向上と威力upにより、85%減としても20ヶを必要とする。

「まず、もっとも一般的な、敷設地雷であるところの「振動爆弾」であるが、これは20ヶを1単位とした放射状敷設を行う物で、1個あたりの重量は5Kgと、非常に軽量である。

この振動爆弾1単位は、近づく装甲振動物の重量に反応して作動する水平指向型(HAM)地雷であり、主にメックの脚部への打撃を狙った構造となっている。」

(又はオルフロード)

☆対装甲HAMでは、仏のMIAAHが有名だけでも、こいつは40m先、入射角0度で70mm、40m先、入射角30度で50mm、40m先、入射角0度で50mmの装甲貫徹能力がある。

これは、自鍛片方式の弾体射出（凹型金属の後ろで炸薬点火、圧力で任意の形状となった破片と言うより弾体を射出する方式で、ミズネ・シャルディン効果と言う(SFF)。有名どころであるモンロー効果(成型炸薬に代表)よりも有効らしい。弾体形状は凹型金属の材質、熱さ、直径、湾曲度、爆轟波の形状で、球状～棒状の自由な形に鍛造変形し、3000m/sで飛んでゆくとのこと。)による。

「この振動地雷の特筆すべき点は、作動基準が接触でなく振動にあるという点であり、その結果、敷設必要数を低く押さえることに成功している。

必要数の減少はそのまま輸送力、点加速度、敷設か能面席に跳ね返ってくるのである。」

☆地雷の作動方式は、踏み板→傾斜桿センサ(マストセンサ)→薄膜付き電気信管と進化しているが、メックはマストセンサが限界。勿論、その応用として、巻き髭センサもある。

現有車両に対しては、成型炸薬によるメタルジェット方式も有効っぽい。少し古いけど1979～イタリアのSB-MV/Tは、磁気、振動復号信管のメタルジェット式で、100mm圧の装甲を貫ける(距離500mm位まで)

「また、『より少ない数で高い効果を狙う場合、埋設型に比して爆轟エネルギーを10倍有効に利用するほうsきとして跳踏型(APBM)があるが、これは在来地雷中、もっとも火薬系列設計技術及び加工技術を必要とするため、当分見送られることであろう。』

「先に説明した振動爆弾は主に限定局地で使用されることが多いが、行軍中の敵に対しての使用も考える場合、散布システムの存在が不可欠になる。」

☆今のシステムには、ヘリ、個人携帯、車載、火砲、ロケット、航空機など多様。